

原子力技術の信頼性を 回復するには？

What is Recovery of Confidence in Nuclear
Technology?

東日本大震災、東京電力（株）福島第一原子力発電所事故（福島事故）から4年半が経った。今もまだ避難しておられる10万人以上の方々に、お見舞いとお詫びを申し上げます。二度とあのような事故を起こさないための努力を継続していくことが重要であると考えている。

福島事故により失われた原子力技術に対する信頼性を回復することは並大抵の努力ではできない。どうしたら少しでも早く信頼性を回復できるか？

まずは、事故の責任に対し、きちんとけじめをつけることである。勿論、想定外の東北地方太平洋沖地震による津波が原因ではあるが、日本原子力学会の会長に就任してから多方面の方々から貴重な情報を数多くいただき、それを整理していくと、“安全に対する慢心”などという言葉では言い尽くせないほどの数々の原因があることがわかった。

客観的に考えたとき、大きな事故になればなるほど、たった1つの原因ではなく、事故を防ぎ得た数々の局面、原因があったといえる。

勿論、津波を防止する高さの問題や地震による全電源喪失への対策など基本的なハードの対策、すべてのハードが完全であったとしても最後に必要となる訓練をも含めたレジリエンス力の醸成までとその原因は様々である。

事故の経緯を逆に考えるといえることがある。まずは、水素爆発を防ぎ得たのではないかと。ということだ。これは以前から指摘されているチェルノブイリ事故の後、欧州の原子力発電所ではフィルター付きベントが設置されたが、日本では然るべき機会を逸した。設置を拒んだ電力会社が

藤田 玲子

Fujita Reiko



科学技術振興機構
ImPACTプログラムマネージャー
日本原子力学会前会長

(株) 東芝 首席技監を経て現職

それとも国がそれを知っていて黙認していたのかが肝心だ。いずれにしろ、これがされていたならば、今回の事故は最後の段階で防ぎ得た可能性がある。

また、福島事故以前に原子力発電所の安全に関する委員会を立ち上げようとしたが、日本では原子力発電所の事故は起こるはずはないとの見解でやはり見送られていたという事実も見逃せない。

中越沖地震から水密構造に改造した電力もあり、どう考えても人災である。この事実にきちんと対峙し、大きな事故には必ず、事故に至らせない複数の防護局面があることを改めて認識すべきである。今回はそのすべてが恣意的に実行されなかった。その責任は誰が取るべきかを、今一度客観的に見直す時期に来ているのではないかと。事故を防ぎ得た種々の方策を具体的に明確にしないため、異常に厳しい規制基準が設置されるなど、そのために諸外国に比べて圧倒的に高い発電コストになっているといっても過言ではない。

日本の原子力界を本当の意味で再生する、すなわち、原子力技術の信頼性を取り戻すためには、起こるはずがないと判断した国の責任者と経営判断で数々の安全施策を怠った当事者が公の場できちんと謝罪すべきである。

これから技術士を目指す若い技術者の皆さんは自分の技術に自信を持つと共に、自分の仕事には責任を持つことがその技術に対する信頼性を得ることであるということをお忘れなでほしい。

二度と福島事故を起こさないためにも責任ある立場の人が責任を取らないことがその分野の推進に最も悪い影響を及ぼすことを認識すべきである。